Defense AI Vision（概要）

変わる戦い、変わらぬ使命



令和8年11月　防衛省

概要

三つの転換で、防衛力の発揮の仕方そのものを変える

目的：AIとデータで情報をより早く行動に変え、人の知性と部隊の行動を拡張する

転換 1
1 情報を迅速に判断と行動につなぐ

情報を保有・処理する組織から、状況変化に応じて判断・行動へつなぐ組織へ

転換 2
2 人間が指揮し、責任を持つ

目的・権限を定め、用途とリスクに応じて監督し、必要時に介入できる体制へ

転換 3
3 AIを自ら選び、改善し続ける

必要なAI・データを自ら選択・評価・改良し、移行も可能な組織へ

全体構成：各章の狙い

第1章　AIと防衛力
目指す姿と三つの転換を明示

第2章　5つの基本原則
人間の判断と責任を確保

第3章　AIの活用分野
任務・業務の進め方を見直す

第4章　データ
データを戦略的資産として活用

第5章　AI基盤
使い続け、改善し続ける基盤

第6章　人材・組織文化
人材育成と組織文化の変革

第7章　国内基盤と連携
主導権の保持と相互運用性

第8章　実行と改善
重点プロジェクトで具体化し評価

文書体系

長期に維持すべき目的・原則と、迅速に変更すべき具体的な取組を区分する

Defense AI Vision
目指す姿・目的・原則

→

実行計画
重点プロジェクトの位置付け

→

重点プロジェクト
事業・工程・責任・資源配分

「人工知能基本計画」やAIに関する関係法令・指針等を踏まえ、防衛分野の特性に応じて取組を進める。

目指す防衛力とAI活用の5つの基本原則

AIとデータの活用を、防衛力の発揮の仕方そのものの変革につなげる。

原則 1	**判断と責任は人間が持つ** 人間が最終判断と責任を担う。用途・影響・リスクに応じて監督し、必要に応じて介入できる仕組みを確保する。
原則 2	**法とルールに基づく責任ある利用** 国際人道法を含む国際法・国内法を遵守する。人間の関与が及ばない完全自律型の致死性兵器の開発を行う意図はない。
原則 3	**安全性、信頼性、透明性及びアカウンタビリティ** 導入前の試験と運用中の監視・再評価により、継続的に確保する。
原則 4	**必要な技術・データを自律的に使い続ける** 特定の事業者等に過度に依存せず、更新・改良・停止・移行を自ら判断する。
原則 5	**任務を起点に、迅速に導入・改善する** 任務・業務の課題と成果指標を定め、安全性と情報保全を確保しつつ試行・改善する。

三つの転換

我が国の主権と国民の生命・財産を守り抜く防衛力へ

1. 情報を迅速に判断と行動につなぐ
2. 人間が指揮し、責任を持つ
3. AIを自ら選び、改善し続ける

第3章

任務・業務におけるAIの活用分野

個別の自動化にとどめず、情報の整理から判断、後方支援まで、任務・業務の進め方を見直す。

1

情報の整理・分析

多様な情報の整理・分析を支援し、人間が情報の意味と確かさを吟味する。

2

人間の意思決定支援

AIが情報や選択肢の整理を支援し、人間が前提や限界を確かめ、自ら判断する。

3

隊員の安全確保

遠隔化やロボティクスの活用により、隊員が危険な環境に立ち入る機会を減らす。

4

サイバー防御とAIの保護

AIをサイバー防御に活用し、モデル・データや利用環境も保護する。

5

後方支援と業務継続

補給・整備・輸送を一体で捉え、効率に加えて支援の実効性と任務の持続性を重視する。

6

行政・管理業務の見直し

文書作成・翻訳等の負担を減らし、政策立案や関係者との調整に時間を振り向ける。

7

教育・訓練と国際活動

教材作成や訓練結果の分析に活用し、国際協力における情報共有や調整にも活かす。

AI活用の前提

最終判断と責任は人間が担う。

任務・業務の課題と期待する効果を先に定める。

第4〜5章

データとAIの共通基盤

データを戦略的資産として管理し、AIの導入後も評価・改善を続ける。

利用環境の整備

通信・クラウド・計算資源を、用途や情報区分に応じて一体で整備する。

継続的な評価・改善

開発・学習・評価・配布の循環を整え、導入後も運用状況を監視し、再評価と更新に活かす。

安全なAI運用

AIエージェントの権限を必要最小限にし、重要な操作は人間が確認する。処理を記録し、人間が必要に応じて介入又は切戻しを行えるようにする。

代替手段の確保

AIや通信が使えない場合の代替手段を確保し、任務に必要な機能を維持する。

データの整備・管理

棚卸し	所在・管理責任・情報区分・利用条件を最優先で把握する。
共通仕様	データの意味と形式をそろえ、組織を越えて利用できるようにする。
品質・保全	品質と来歴を管理し、参照用と学習用を区別する。職務に応じてアクセスを制御する。
継続利用	更新・移行に必要な仕様と利用権を確保し、特定事業者への過度な依存を避ける。

作成から廃棄まで取扱条件を管理する。

第6〜7章

人材・組織文化と国内外の連携

省内の人材を育て、国内外の知見を取り入れながら、選択と継続利用の主導権を保つ。

全員の基礎	全ての隊員・職員がAIの限界を理解し、出力の誤りや偏りを自ら確かめる。安全に試行できる範囲を明確にし、得た知見を組織で共有する。
専門人材	AI・データの専門人材に加え、現場の要求を技術要件に落とし込み、事業を率いる人材を育成する。
外部の知見	企業・大学等の専門性を研究開発・評価・人材育成に活かし、共同事業で得た知見を省内に残す。

国内基盤と国際連携

主体的な技術選択と、同盟国・同志国等との相互運用性を両立する

1. 官側が要求・評価基準を定め、内製と民間活用を組み合わせる。
2. 評価・データ管理・改良に必要な中核能力を国内に維持する。
3. 機微なデータと判断の主導権を保ち、標準化や共同実証を進める。

第8章

三つの転換を実行し、不断に改善する

AIの導入件数ではなく、三つの転換が任務・業務で実現したかを評価する。

ビジョン	**目的と原則を示す** 長期に維持する指針とし、目的や基本原則に関わる重大な変化があれば本文を見直す。
実行計画	**重点プロジェクトを定める** 任務・業務の課題と成果の確認方法を明確にし、現場の知見を次の取組に反映する。
成果指標	**任務・業務の変化を測る** 判断の質と速さ、隊員の安全・負担、総経費などから、プロジェクトの目的に応じた指標を設定する。

実行体制

デジタル統括責任者

AI統括責任者・データ統括責任者を兼務し、一体的に統括

データ管理組織

共通仕様・組織横断の調整

重点プロジェクトの実施と評価

具体化	効果と実現性で選定し、責任者・工程・資源・指標を定める。
評価	実施前後の変化を確かめ、継続・拡大・変更・終了と資源配分を判断する。
見直し	評価結果や技術・制度の変化を踏まえ、計画を更新する。